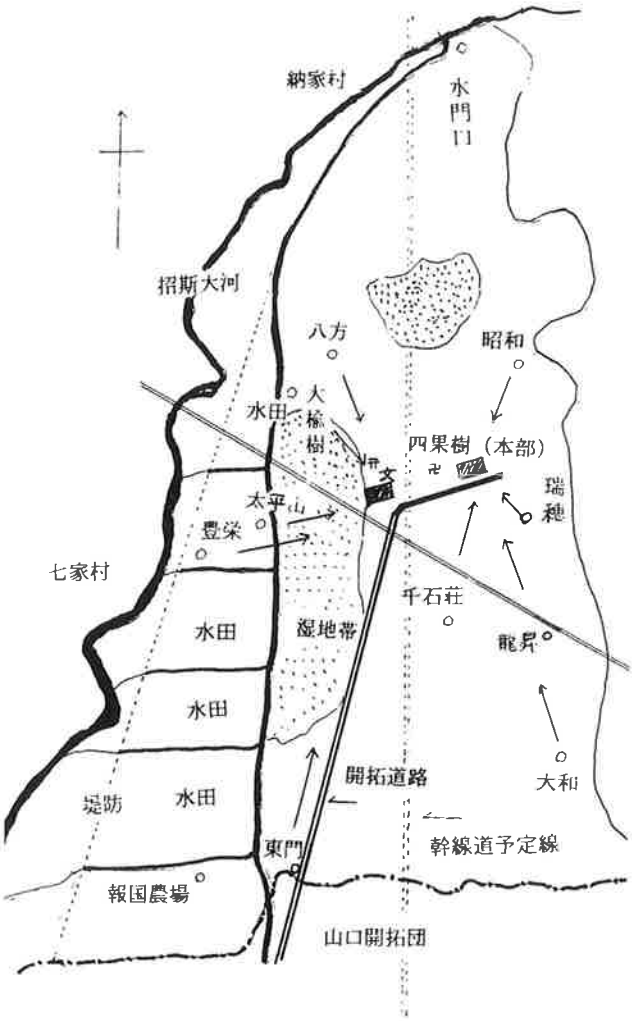
満州佐伯村おぼえ書（続）

第十次昌図佐伯開拓団小史（三）

矢野徳弥
（会員・南海部郡本匠村）

佐伯開拓団概況図



三　治安情勢悪化（二十年九月）

（日本軍特殊部隊）

日本軍の駐屯と、銃を携えた青年隊の存在により、しばらく平穏な日々が続いたが、九月に入った初日の夕刻一時、団内を震憾させる事件があった。七家村方面から本部方向に近付く騎馬の一団を、ソ連軍と見誤ったのである。団長の手記には

九月一日

西方対岸よりソ連軍進駐し来るの報を受け、婦女子の避難を命じ、不安に駆られつつ待機したるに幸い誤報にして、興安地区に覆面部隊として行動中なりし、松浦少佐以下四十八名の幹部よりなる特殊部隊にして、何等の情報（ソ連軍の侵攻、八月十五日の敗戦など）も得ず、東部方面に移動中立ち寄りしものにして、無条件降伏せるを聞き、悲嘆、憤激す。

とある。全員が将校で、特殊任務に服しているとして多くを語らず、二日滞在した後、東の方（満鉄沿線）に去っていった。何とも不思議な日本軍であった。

幸い、この事件は間違いで済まされたが、予想されていたこととはいえ、団にとり憂慮すべき事態が、数日後に迫っていた。

（日本軍の撤退）

九月五日

団駐屯中の警備兵は、昌図に集結を命じられ、ソ連軍のため武装解除を受け、北方に送致さる。

十八日間、この地にあって開拓民を守った日本軍は、本部からの命令で、昌図に撤退することになった。兵員は僅かであったが、機動力を持つ武装兵の駐屯は、敗戦を忘れさせられるほどの平和をもたらし、兵士たちも故郷の村に帰ったような寛ぎを見せていた。しかし、その蜜月の生活は短かった。一行は、やがてシベリヤに送られる運命とも知らずに、別れを惜しみつつ団を後にした遠ざかるキャタピラの音は、地区一帯の住民に、開拓村が、無防備状態となったことを教えた。

治安の悪化は必至である。団は非常体制に移行する。

九月八日

警備兵撤退の後にくる治安維持方法を指示するために、全団員を集合せしめ、警備方法を指示し、

あくまで現在地に留まることを宣言し、最悪の場合、本部並びに学校に集結することとし、食糧、燃料の収集・貯蔵を図り、稲の早期刈り取りを励行せしむる。

本年の作況

稲作は、天候順調と挿苗の実施により、皮肉にも入植以来の大豊作に恵まれ、三千石の収穫が予想され、刈り取りも進捗し、水田一面山と積まれた稲束に感激の涙す。脱穀後の貯蔵は、土匪の襲来に備えて地下に埋没すべく指示する。

（治安維持会の結成）

全団挙げて稲刈りに取り組んでいる最中、昌図方面の日本人会より、

「日本軍撤退後の治安対策として、治安維持会を組織し公安隊を置いて自衛措置を講じてはどうか」

という勧めがあり、塩飽昇という元満州国軍少佐が派遣されてきた。

これを受け、九月十六日、山口の本部に三団の団長と土地の中国人有力者らが集まり、「開拓総団治安維持会」を発足させ、公安隊を設置することを決め、その運営を塩飽元少佐に任せることとした。

九月十六日

現地の日満人、会議の上、開拓地区内において治安維持会を設置。公安隊を置き、警備に任ぜしむ

この措置に対し、佐伯開拓団長の矢野は、

「独自に公安隊を置くという趣旨は分かるが、多少とも統制力のある軍隊、あるいは警察隊ならいざ知らず、解散したばかりの旧満軍兵士や、土地のならず者を集めて急造した傭兵隊に、地区の治安を委ねるとは、如何なものか」

として、不信の念を隠さなかった。二・三日した頃から圃場の様子がおかしくなり始めた。

この頃より、水稲の盗難頻発し、満系公安隊の態度疑惑なり。

と、手記の補遺には記されている。

公安隊が手におえぬのは、彼等が武器を所持していることだった。程なく周辺の土民たちも、白昼堂々稲を盗み刈りするようになり、これを阻止しようとする団員との間に、激しい対立が見られるようになった。こちらにもまだ銃器があり、いつ流血の惨事に発展するか、まっ

たく予断を許さなかった。

九月二十日

水田地域の状況、とみに悪化したるにより、報国農場にありたる女子隊員を、国民学校に引き揚げせしむ。地区内原住民の態度悪化し、旧地主層を回り、開拓民追放の謀議あるを聞く。

（広陵開拓団員の収容）

治安維持会が発足したその日、昌図の日本人会から、「広陵開拓団が現地を離脱。宝力鎮方面に向かったので収容を頼む」

との依頼があり、準備を整えて待ったが、一行が到着したのは、それから六日遅れた二十二日の夕刻であった

九月二十二日

両家子地区に入植したる広陵開拓団は、治安不良なるため逃避し来たり、約百名の人員を収容す。

広陵開拓団は、広島県下の転業者で構成され、佐伯団の西方約四〇キロメートルの地点に、前年度入植したばかりであった。

八月三日以来、両家子地方は数十年ぶりといわれる集中豪雨に見舞われ、団の全域が浸水して、耕地は壊滅し部落は孤立状態に陥っていた。そこに非情にも敗戦の悲報が届いたのである。

翌日から武器を所持した土匪の襲撃が始まり、孤立した部落に死傷者が続出した。全滅の危険を感じた本部は再三にわたり昌図に救援を求め、二十六日の夕刻、田村部隊から一一八名の救援隊が到着した。

その翌日、血気に逸る若い隊長は、土匪がいると疑われる中国人の部落を攻撃し、民家に火を放つとともに、良否の区分を考えることもなく住民一八名を殺傷した。

ところが、これが裏目に出て、周辺住民の激しい怒りを招き、もはや日本人の残留が許される状況ではなくなった。軍は、

「保護のある間に、一日も早くここを去るよう」

強く勧めた。

九月十六日、団長は水没を免れた唯一つの部落「乃木山」に全員集結するよう指示したが、途中、小舟を使わねばならず、これに三日を費やすうち、軍はソ連軍の命令で昌図に引き揚げてしまった。すぐさま略奪が始まり裸同然の姿となってようやく十八日に集結を終えたが、行く先をめぐって論議がまとまらず、四〇名は同行を拒

否した。

翌十九日、団長に従う二九〇名は、「乃木山」を出発し、北側に大きく迂回して宝力鎮に向かった。途中、数度の襲撃があったが、幸い、銃器を所持していたため撃退することができ、二十二日夕刻、三つの開拓団に収容された（広陵開拓団長戸津川繁蔵）。

「収容されてみると、ここは稲刈りの真っ最中であった団員の多くが招集されて男手は少なく、あからさまに稲を盗み刈りする土民と争い、戦場にいる思いで、死力を尽くして働いた」（広陵団員）。

月末近くになると、埋めた籾を巡り、これを奪おうとする土民と、必死になってこれを守ろうとする開拓民の争いはますます激しくなり、水田一帯には殺気が漂い始めた。そして、この極度の緊張の中で、前途を悲観した農場隊員が、一方的に好意を寄せた女子隊員と、警備の銃で無理心中するという、衝撃的な事件まで発生した。

四　部落放棄（二十年十月）

（竜昇、襲わる）

十月に入って、治安は一段と悪化し、これまで周辺に限られていた土匪の襲撃が、団の中央部にも及び、ついに死者を出すまでになった。

十月一日

龍昇部落に土匪襲来し、爆薬を使用して家屋を破壊侵入。防戦したる三代徳一は土匪の槍に刺殺される。

団の指示で、応召中の三代鷹男（小野市村）の留守宅でも、窓を土煉瓦で塞ぎ、戸締まりを厳重にして万一の事態に備えていた。しかし、この夜の賊は入口を爆破して侵入し、抵抗する父徳一の腹部を槍で刺し、家族の怯むすきに衣類・金品を奪うなど、やり方がいかにも残虐であった。手口からして、土匪というより公安隊の一部ではなかったか、疑問は残る。

これから後、場所を問わず各方面の部落が、毎夜のごとく襲撃に苦しむようになった。

（農場炎上、部落放棄）

そこに、今度はソ連軍より武器押収の通告があり、団は全く自衛の手段を失い、全部落が壊滅の危機に晒されるようになった。

十月九日
ソ連軍使の布告により、民間所持の武器一切を公安隊に提供するよう強制され、警備銃、狩猟銃、日本刀等ことごとく押収され警備力を喪失する。よって警備力保持のため、分散家屋を放棄し部落単位に集結することを命じ、展望台を設け、夜間連絡のため点火信号を準備し、厳重警戒を指示す

十月十日
武装解除を機とし、水田地区全面に亘り土匪襲来し、稲の略奪をなす。夜間、全部落土匪の襲撃を受け、家畜・家具の略奪を受く。被害甚大である

十月十一日
昭和・瑞穂の両部落、深夜襲撃を受け、ついに部落を放棄し、団本部に避難し来る。
報国農場隊員は農場を捨て、東門部落に避難す。情勢なお悪化の実情に鑑み、部落を全面的に放棄し、本部並びに国民学校に集結を指令する。
自治公安隊は、土匪と通謀し頼み難きをもって、手槍を作成し、防衛に当たらしむる。
農場に土匪放火し、全農場施設炎上す。

龍昇・千石荘・豊栄・太平山等の部落を放棄し国民学校に集結。家財、その他の略奪を受け、今後の生活憂慮さる。

十月十二日
八方部落五十余名の者、裸体のまま引上げ来る。負傷せる者あり、惨状を極む。染矢新太郎（上野村）工藤弥助（中野村）の両名は凶刃に倒る。
東門部落、また支え得ず、本部に避難し来る。
夕刻、昌図県公安隊第三中隊の一部到着。治安維持に当たる。
自衛の武器を失ってわずか三日間で、団は惨澹たる状態に追い込まれた。
（本部、国民学校包囲さる）
その翌々日、集結の混乱の続く団本部と国民学校が数千人と思われる土匪、土民の群れに囲まれた。まるで最後の総攻撃のようであった。

十月十三日
土匪数千、早朝より団本部を包囲し、手に槍をふりかざし、大勢を擁して最後の略奪を企図せるをもって全団を挙げ最後の決戦を行うべく、白布を

―持って鉢巻きし、交戦する・・・。

この日の早朝、近くの農民から、

「土匪の大群が押し寄せて来る！」

と通報があり、望哨に上がると、黒山のような人間が本部と学校を包囲しているのが見えた。門が破られれば全滅の悲運となることは必至であった。急いで老人婦女子を裏の梨畑に避難させ、すべての門が閉ざされた。

団長は

「おそらくこれが最後の決戦となるかもしれず」

として、万一の場合は、家族を敵手に委ねることなく自らの手で処分するよう・・・全員に納得させた。

稗田甚三の指揮する三一名の青年隊は、密かに日本刀を三つ切りにして作った鋭利な手槍を持ち、全員白鉢巻きを締めて門前に立った。土塀は堅牢で門が破られぬ限り侵入はできない。激しいにらみあいが何時間も続いたが、決死の形相に恐れをなしてか相手は容易に近付けなかった。そのうち、手槍を持った新しい相手の一団が、後ろの群衆に押されるようにして前に出てきた。まさに死闘が始まるかに見えたその瞬間である。突然銃声がして先頭近くの数名が倒れた。

急を知って、国府系の公安隊が救援に駆け付けたのである。一瞬、相手の怯んだところに青年隊が突っ込んだが、彼等は容易に退こうとはしなかった。公安隊はついに機関銃を使用して威嚇を行い、五〇名を越える死傷者を出し、ようやく一時間後に撤退した（稗田甚三の手記団長の別の手記などによる）。

一方、国民学校の方はどうであったか。事件の現場にいた北山直之は、次のように語っている。

日本人に反感を抱く宮延藩（元県長）や、旧地主が煽動して動員したと思われるが、本部同様に黒山のような人間に取り囲まれた。建物は堅固な煉瓦造りだが、外にまったく防壁がない。このため包囲網が段々と狭められて来る圧迫感、恐怖感は言語に絶するものだった。

輪の一部が運動場を越え校舎の入口近くに迫ったところで激しいにらみあいとなった。対立は十時間もその上も続いたと思う。心理的な圧迫で、開拓民たちが自壊するか、逃げ出すのを待つやり方だった。若い団員や、農場隊員の間には悲壮感がみなぎり、老人婦女子を自決させた上で打って出るといい、実行を迫る連判状を森脇校長に提出した。しかし、校長は極めて胆力のある人で、

「分かっている。最期のことは俺が決める。こちらから仕掛けてはならぬ」

と厳しく戒めた。こうした危機の時長老の存在は極めて貴重なもので、もしあの時、森脇校長や兄貴（基幹先遣隊長北山武雄）などがいなかったら、きっと悲惨な結末を迎えていたに違いない。

そのとき校長と親交のあった土地の農民から使いが来た。

「彼等は煽動されている。本当はなにがしかの物が欲しいのであって、危害を加える意思はない。どうか自重して、しばらく時を待つように」

というのであった。

夕方になり、正規の公安隊が来て、危機は一応去った…折よく県公安隊百余名到着。これが援助を得て撃退し、捕虜三十余名をえて、ついに危機を脱す連絡不明で気遣われた大和部落の一行、本部に到着し、ここに全団員七百余名の集結を完了したるをもって、団組織を改め本部を第一集団、国民学校を第二集団とし、前後措置に当たらしむ。

同じ日、山口開拓団との境、東門部落に避難していた農場隊員も襲われたが、これも公安隊に救出された。

（越冬準備）

十月十四日

公安隊の応援を得て、部落に残存する食糧の収集に着手したるも、すでに土匪が強奪、土地の住民も隠匿、公安隊も無理をいわず、籾の収集し得たるもの約三十屯に過ぎず。食糧の前途憂慮せらるるをもって給食規制を始む。

爾後、公安隊の駐屯により、治安漸次回復したるをもって、燃料の収集、宿舎の整備など越冬準備着手す。

（国民党の治下へ）

満州国の崩壊後二ヵ月が経過し、昌図県下にもようやく国民政府の勢力が浸透し、開拓地一帯の治安も改善の兆しを見せてきた。

十月十五日

中国国民党政治工作員入団し来たり、主席の方針として「在留日本人捕虜の生命財産を保護する」旨宣し、公安隊の一部不良分子の追放をなす。

設置の当初から疑惑視されてきた塩飽元満軍少佐の治

安維持会も公安隊も、十月の終りには解散させられた。

国民党の工作員が来た翌日から、佐伯地区は平静を取り戻し、部落に残されていた遺体も収容し、丁重に弔った後、本格的な冬の準備に入った。

しかし、その頃北方から、共産党の勢力が急速に浸透し始めた。

『満州佐伯村おぼえ書き』が単行本になりました。

著者略歴

矢　野　徳　弥（やのとくみ）

大正13年６月22日生

大分県立三重農学校卒業。
入学前の一時期、農会の職員として移民業務に関与。
学校卒業後、一年間を満州佐伯村の現地で暮らす。
そのあと軍隊に入り、シベリヤ抑留を体験。
戦後、獣医師試験に合格。
南海部畜産農協、大分県農業共済連などに勤務。
帰郷して本匠村に勤務（収入役四期）。現在退任。
佐伯史談会会員